

6月18日、地元島根県益田市へ西日本ヘルスリサーチ代表・森田洋之先生をお呼びした。地元の市民の皆さんに地域の在宅医療を少しでも知ってもらい、その対策を少しでも進めたいとの思いからだった。また夕張市が破たんした後の診療所に4年間勤められ、地域崩壊と住民意識がどのように変化したかを教えてもら

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

住民に在宅医療の関心薄く

うためでもあった。数カ月前から準備を開始して行政、医療現場とともに、安心して住める地域作りを行っていくことと思いついた行事の一つだった。

しかし地元住民にはまったくその気がなかったようだ。150名の参加を予定していたにもかかわらず、たったの50名の参加しかなかった。告知の仕方や地域の行事が重なったこともあったが、大きく期待を裏切った結果となった。高齢者が多く、自分たちが受けなければいけない終末期医療をまったくくごとのように感じたのだろうか。さらに終末期をフォローしなければいけない家族も無関心なのか。

参加されていたほとんどの皆さんは沢山メモを取っていた。少数ながら勉強したい方がいたことには安堵した。またその中に若い方が2名参加していた。森田先生も気がつかれて、講演中にも2人へ何かと声かけをしていた。お年寄りが多量中、目立った存在だったからだ。

後日2人を食事に誘い出した。施設に勤務する歯科衛生士と精神病院に勤務する作業療法士だった。まずこの講演会に参加した意味を問うた。すると2人ともいずれは在宅医療をやりたいらしい。現在の仕事には満足していないようだ。それでこの講演会に参加して学びたいの思っていたようだ。食事をしながらいろいろな話をした。

まず7月上旬にある勉強会への参加を促した。この勉強会は3年前から行っている在宅医療を実践しているメンバーの集まりだが、1年前から患者の私が参加している。最近患者仲間も誘って勉強している。

さらに9月に開催する「がんサロン支援塾」にもスタッフとして参加を依頼した。快く参加の意思を示してくれた。

今後わたしたちの活動と彼らが望む行動をいかに横の糸として結び付けていくかが大きな課題。地域の将来のため、彼らの将来のために。